

開催倶楽部会員からオープンレフェリーを—— 東京ゴルフ倶楽部 森脇氏の挑戦

昨年、JGA創立100周年の記念大会となった日本オープンゴルフ選手権に会場の東京ゴルフ倶楽部会員でもある森脇純夫氏がレフェリーとして参加した。森脇氏は開催倶楽部会員からオープンレフェリーを養成しようという試みから生まれた新しい形のレフェリーだ。未経験から約2年でオープンレフェリーを務めるまでになった森脇氏に、その道のりを聞いた。



—— まず、森脇さんがレフェリーを目指したきっかけをお聞かせください。

森脇 2022年の夏ごろだったと思いますが、JGAの規則委員会委員長で東京GCの会員でもある鈴木淳さんから「2年後に東京GCで日本オープンが開催されるにあたって会員の中からレフェリーを養成したいとJGAと話しをしている。12月に行われるJGAのルールテストに向けての勉強会を競技委員会のメンバーを中心に作ったから関心がある方は参加してください」という話がありました。私は競技委員ではなかったのですが、ゴルフ規則を学ぶいい機会だと思って入れていただきました。

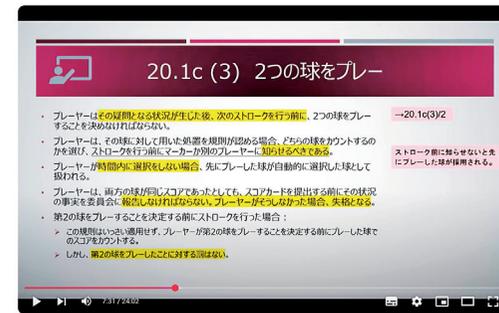
—— もともと学生時代などに競技ゴルフをされていて規則に興味があったのでしょうか。

森脇 いえ、学生時代にゴルフ部だったということではありません。私の仕事は弁護士なのですが、1981年に24歳で弁護士になったところに同業の仲間とゴルフを始

めました。東京GCに入会させていただいたのは2004年ですが、競技は倶楽部競技に参加している程度です。ハンディは10から11くらい。典型的なアマチュアゴルファーです。規則に関しては以前から分からないところは規則書を見るようにはしていたのですが、読んで理解しづらいところがありましたからこの機会に勉強しようと。日本オープンでレフェリーをやりたいというよりも、規則をきちんと勉強したいという気持ちが先でした。

—— 勉強会にはどれくらいの会員が参加して、どのような内容だったのでしょうか。

森脇 参加されたのは競技委員らを中心に8、9人だったのでしょうか。どこかに集まるのではなく、JGAルールズコミッティの市村元チーフディレクターがゴルフ規則を1条ごとに解説する20～30分の動画をつくってくださり、それを各自が都合のいい時に視聴するという形でした。3か月ほどかけて1条ずつ勉強し、12月にJGAのルールテストに臨んだわけです。



JGA作成のゴルフ規則解説動画を視聴した

—— ルールテストはどのような形ですか。

森脇 オンラインで、1時間で100問でした。80点以上でB級レフェリーの資格が与えられ、3オープン(日本オープン、日本女子オープン、日本シニアオープン)の地区予選と最終予選のレフェリーができるようになります。

—— 東京GCの勉強会参加者でクリアできたのは森脇さんおひとり?

森脇 はい。途中でリタイアされた方やいろいろな事情で当日テストを受けられなかった人が数人いて、結局ルールテストを受けて合格点を取れたのが私1人。鈴木さんから「合格したのは森脇さんだけだからレフェリーやってくれるのでしょうか」と言われて、引っこみがつかなくなりました(笑)。

—— その時点で森脇さんが2024年日本オープンでレフェリーをされる流れが決まったわけですね。

森脇 本選でレフェリーをするには3オープンの予選競技で10ラウンド以上レフェリーをこなしてA級の資格を得ることが必要です。逆算すると、翌年のルールテストで合格しても間に合いませんから私がやるしかなくなったのです。

—— ルールテストをクリア後、予選競技でレフェリーデビューするまでにはどのような準備をされたのですか。

森脇 翌2023年の1月と3月に新人レフェリーを対象にした実際のコースを使うロールプレーの講習を受けました。そこで感じたのはルールテストと実際のルーリングはまったくの別物だということ。この場面で適用されるルールは何かということを瞬時に判断して選手役の講師の方とやりとりするのですが、紛らわしい状況が設定されているので、なかなかうまくいかなかったですね。

—— そして初めてレフェリーとして予選競技に臨んだわけですね。

森脇 はい。5月に東京GCで日本オープンの地区予選がありまして、そこがデビュー戦でした。

レフェリーへの道のり



—— 緊張感はいかがでしたか。

森脇 最初は不安でいっぱいでした。ロールプレーではあまりうまくいかなかったので緊張感はありましたね。ただ、実際のルーリングはロールプレーのような紛らわしいものではなく単純なものが多かったですから、回数を重ねるごとにだんだんと落ち着くことができました。

—— その後はどのようなスケジュールでレフェリーを務めたのでしょうか。

森脇 この年(2023年)はデビュー戦を含めて地区予選が4回、そして8月の末に2日間の日本女子オープン最終予選に行きまして、計5つの予選競技で6ラウンド、レフェリーを務めました。

—— レフェリーをされる時は仕事を休まなければならないと思いますが、本業との兼ね合いは問題ありませんでしたか。

森脇 前日の昼間にコース入りして担当するホールの下見などやるべきことがたくさんあります。ですから1日競技の地区予選は実質2日掛かり、2日競技の最終予選は3日掛かりになります。私の仕事は自分である程度調整はできますけども、仕事との兼ね合いをつけるのがそれなりに大変な時期もありました。それでも、2年間で所定のラウンド数をクリアすることはできました。



R&A Level 3ルールセミナー。規則紛議のビデオを見ながらディスカッション、コース上でのレフェリー・ロールプレーなど 実践的な知識、技術を習得

—— 予選競技のレフェリー以外にも何か勉強されたりしたのでしょうか。

森脇 レフェリーとして所定のラウンド数をこなすほかにJGA指定の講習も受ける必要があり、その中にはR&Aのレベルテスト受験もありました。レベル3のテストは2024年2月にあり、無事合格できましたので翌月に2日間にわたって東京GCで行われたレベル3のセミナーにも参加することができました。



東京GCで開催された日本OPで3番ホール左側の林にて松山榮生選手に管理道路からの救済措置の裁定をした森脇氏

—— 日本オープンでレフェリーをするためにはレベル3テスト合格が必須なのですか。

森脇 いえ、JGAとR&Aの資格は別なのでJGAのA級資格を持っていればオープン競技でレフェリーはできます。ただ、実際に選ばれるかどうかはチーフレフェリーが決めること。私の場合は東京GCの会員の中から日本オープンのレフェリーを養成するというプログラムの中でやらせていただいたので特殊なケース。経験豊富なベテランの中に新米が入ったという形でした。

—— いよいよ日本オープン本番。それまでとは違う緊張感はありましたか。

森脇 やはり予選とは雰囲気そのものが違いますし、独特の高揚感がありました。ただ、前年の日本オープンにオブザーバーとして行かせてもらい、レフェリーの方のルーリングを実際に拝見させていただいていましたので、その経験は助けになりました。

—— 実際にホームコースで4日間、レフェリーをされていかがでしたか。

森脇 前回、東京GCで日本オープンが開催されたのが2001年で、私は2004年入会ですから経験していませんでした。会員である期間に自分のホームコースで日本オープンが開かれるということはなかなかないことですので、何かの形で貢献できればと思ってはいたのですが、まさかレフェリーという形で参加するとは思っていませんでした。



日本OP初優勝を飾った今平周吾選手、ローアマチュアを獲得したキャンベル選手と森脇氏（前列左から3人目）らオープンレフェリーの集合写真

—— コースはふだんプレーしている状態とはかなり異なっていたのではないのでしょうか。

森脇 何百回と回っていますが、こんなに難しいコースだったのかと思いました。特にラフですね。とぐるを巻いているような状態で、ラフに入ると球探しが難しいわけです。試合中、近くで球探しが始まれば駆けつけて一緒に探すのですが、レフェリーは3分の搜索時間を計測しなければならない。首から下げているストップウォッチを「今から計測を始めます」と宣言して押すわけですが、とても嫌な瞬間です。ボール探しに長けたボランティアの方が要所に配置されていましたが、あれだけのラフですとなかなか見つからない。搜索時間内に見つかりと本当にホッとしました。

—— 2年間レフェリーをされて、やってよかったと感じた点がありますか。

森脇 ふだんはデスクワークが中心の仕事ですから、それとは真反対に一日中コースにいる仕事は自分にとって新鮮な経験でした。それに、競技はこれほど多くの裏方のみなさんに支えられているのだということも実感できました。例えば、我々レフェリーは朝5時半前にコースに入りますが、その時間にすでに食堂で朝食が準備されているのです。つまり、コースの方はもっと早く出てきているわけです。グリーンキーパーをはじめ、コース整備のみなさんもそう。この年齢になってこんな新

しいことを経験できるとは思わなかったもので、ありがたかったですね。

—— ご自身が感じたレフェリーの魅力などありましたらお話しいただけますか。

森脇 レフェリーの役目は規則を公平に適用し、フィールドにいる全員が公平な条件のもとで競技ができるようにすること。競技の公平な進行に少しでも貢献できるというのはやりがいがあると思います。

—— 実際に経験された開催倶楽部会員からレフェリーを養成するプログラムについてはいかがですか。

森脇 倶楽部にとっても個人にとっても、より深く競技に貢献できますから、とても意義のあることだと思います。

—— 専門的な知識や経験がない状態からでも約2年でオープンレフェリーを務めることが可能だと森脇さんが実証されたと思います。森脇さんがロールモデルとなってこれからも開催倶楽部からオープンレフェリーが生まれることをJGAとしても期待しています。

森脇 レフェリーはさまざまな職業の方がボランティアでやっているのですが、みなさん喜々としてやっていらっしゃる。それだけレフェリーという仕事自体に魅力を感じているということではないのでしょうか。私自身も本当にいい経験をさせていただいたと感謝しています。

—— ありがとうございます。